

# まい田園暮らし

in  
HOKKAIDO



掲載内容についての  
お問い合わせは各町まで

- 南幌町総務課  
〒069-0292 南幌町栄町3丁目2番1号  
TEL : 011-378-2121 (代) URL : [www.town.nanporo.hokkaido.jp](http://www.town.nanporo.hokkaido.jp)
- 長沼町総務政策課  
〒069-1392 長沼町中央北1丁目1番1号  
TEL : 0123-88-2111 (代) URL : [www.maoi-net.jp](http://www.maoi-net.jp)
- 由仁町企画課  
〒069-1292 由仁町新光200番地  
TEL : 0123-83-2111 (代) URL : [www.town.yuni.lg.jp](http://www.town.yuni.lg.jp)
- 栗山町まちづくり推進課  
〒069-1591 栗山町松風3丁目252番地  
TEL : 0123-72-1111 (代) URL : [www.town.kuriyama.hokkaido.jp](http://www.town.kuriyama.hokkaido.jp)

制作：南々空知地域ロングスティ型移住ビジョン策定委員会（事務局）  
〒060-0004 札幌市中央区北4条西6丁目1毎日札幌会館（株）ノーザンクロス  
TEL : 011-232-3661 URL : [maoi-life.com](http://maoi-life.com)

2007年3月発行  
「まい田園暮らし」は平成18年度全国都市再生モデル調査「南々空知地域のスローライフを満喫するロングスティ型移住ビジョンの策定」業務により作成しました。

古紙配合率100%再生紙を使用しています



# ゆったりと、ゆっくりと、丘のあるまちに暮らす日々。

農が豊か、食が豊か、人が豊か

馬追丘陵(まおいきゅうりょう)。

札幌から車で国道274を西方向に進む。丘に向かって、道は真っ直ぐに伸びている。

なだらかな丘が豊かな緑の裾野を広げて、出迎えてくれる。

ようこそ、まおい田園空間へ。

## maw-O-i

### ■まおいの由来

「馬追(まおい)」の語源は、アイヌ語の「maw-o-i(マウオイもしくはマオイ)」に由来する。

意味は「ハマナスの実-多い-ところ」。

3000年ほど前の馬追丘陵は、海に浮かぶ島だったという。

なるほど、海辺の植物ハマナス。丘に登って、目を閉じれば、はるか太古の大平原を眺めることができるかも知れない。

## 原野と川丘

### ■まおいの生い立ち

馬追丘陵に登ると、広大な石狩平野が望める。100年以上も前に移住した先人たちは、暴れ川と化す夕張川と折り合いをつけながら、この平野に田園を切り拓いた。ところどころに暴れ川の名残が、沼となってその記憶をとどめている。

女流作家・辻村もと子は長沼開拓者の一人だった父の残した開拓日誌を基に長編小説「馬追原野」を執筆し、1942年に第1回樋口一葉賞を受賞。記念の文学碑が、馬追の丘の上に立つ。

さわやかな夏  
キリリと冬  
冷え込む

### ■まおいの気候・風土

夏はカッと暑く、冬はグンと冷え込む。2006年の最高気温は8月の33.4°C、最低気温は1月の-20.4°C。

また、まおいは梅雨知らず。6月の日照時間が116.4時間(東京79.5時間)、7月159.2時間(東京59.2時間)とさわやかな仲夏を過ごすことができる。



大きな空  
ゆるやかな丘  
のびやかな田園

### ■まおいの農業と景観

地平線を眺めていると、心が落ち着いていくのは、なぜだろう。

視界をさえぎるものがない開放感。

空が広い、景色のスケールが大きい。それだけで、気持ちが豊かになれる。思わず誰かにすすめたくなる。

この景観を生んだ農業がまおいの基盤。夕張川が運んだ豊かな土壌と冷涼な気候により、稻作、畑作、果樹・花き栽培が盛んな北海道の穀倉地帯である。



まおいへのアクセス  
[首都圏から飛行機で]  
●羽田～新千歳／空路で90分  
[車利用]  
●新千歳～まおいエリア／40分  
●札幌IC～まおいエリア各町市街  
※高速道路・国道利用  
・南幌町まで約20分　・長沼町まで約40分  
・由仁町まで約50分　・栗山町まで約40分



●大規模なキャベツ畠／南幌町



●親子でカヌー体験／南幌町



●町営スキー場／長沼町



●札幌からのファンも多い農産物直売所／長沼町



●「ゆにガーデン」に隣接する体験農園／由仁町



●花のまちの花いっぱい活動／由仁町



●国の登録有形文化財・小林酒造の酒蔵群／栗山町



●じゃがいも畠と麦畠／栗山町

Kuri  
yama

「考えてみれば、僕はどんどん小さなまちへと移り住んでいるなあ」。まおいエリアの東に位置する栗山町でガラス工房を開設する中川晃さんは、ガラスを通しての芸術性の高まりとともに、東京、小樽、江別、そして栗山と、その仕事場を移し変えてきた。それは「自分を見つめ直すための手段のひとつでもあった」というが、現在の代表作である『ひとがた』は、このまち栗山町に移り住んでから創出したものだという。

まおい暮らしが作風に影響を与えた?  
「うん、それはどうだろう。そうかも知れないけど、ここに越してきて感じたのは、人が見えるということ。小さなまちゆえに、それぞれの人の立場や役割がよくわかる。まず、役場が近いと感じる。都会では役所なんて、すごく遠い存在だからね」

そもそも中川さんにとって、なぜ栗山だったのだろう。「このまちに住みたいと強く願ったわけではなく、人を介してこの場所との出会いがあったんです。大きくて重い窯が置けるスペースを確保できること、大音量の音楽をガンガン流せること。僕の工房の条件にかなう場所はそう多くはないから、正直なところ条件があえばどこでもよかったです。僕にとっては、住む地を選ぶというよりは、受け入れるという意識が大きく左右していますね」と中川さん。

不便さも、土地柄も、その環境をすべて受け入れる。そこから見えてくるものも少なくないという。「たとえば、都会のアスファルトの上では、雨が降ってもその雨の行き場所が見えない。田舎では、地面がどれだけ水を吸ってくれているのかがわかる。自然とともに生きていることに、大きな感謝と感動を覚えます」。モノやコトを見つめる中川さんの視点は、鋭く、限りなく優しく、真摯だ。

インタビュー終了後、愛犬の「種」を抱く中川さんの表情がふとやわらいだ。あるがままを受け入れる芸術家は、気難しくて、優しくて、サービス精神が旺盛で、そして何より“生き物”と豊かな自然を愛する人間であった。



どうしてもこの町でなくちゃという理由は、僕にはないね。住む地を受け入れるってことで僕は生きてきたから。

■中川 晃さん ガラス作家

A 中川さんが生み出す、“そこにある生命感”。栗山町に移住してから創作された『ひとがた』シリーズ。



B 工房には、重さ3トンの窯が鎮座する。引越しの際の移動にはフォークリフトに大人5人の重りが必要だった。



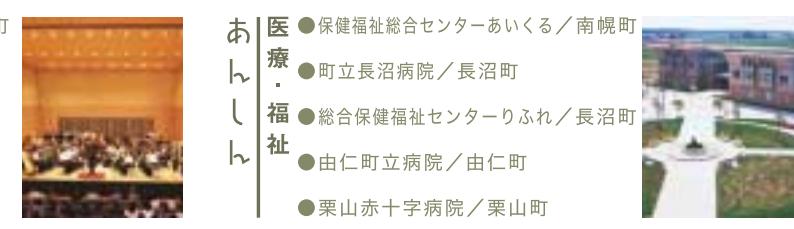
C ガラスを溶かす炉。炉内の温度は1100℃を超える。



D 父方の祖父は、美術史の碩学・中川忠順。工房の壁にピンナップされた古写真的のコピー。前列右が忠順、中央が岡倉天心。

**まおいエリアには、こんな施設が。** 健やかでんしんな暮らしのために、日々を楽しむ暮らしのために、まおいは生活インフラも充実しています。

育  
む  
文  
化  
●子育て支援センターすまいる／南幌町  
●長沼町図書館／長沼町  
●図書資料館ゆめっく館／由仁町  
●文化交流施設ふれーる／由仁町  
●北海道介護福祉学校／栗山町



■森下 武さん・由岐子さんご夫妻 農業



A まきストーブのある生活。  
北海道暮らしで、ご主人の武さんがまっさきにリクエストしたのが、これ。



B 森下ご夫妻が主宰する  
「小さな農園・ユクミンタル」の  
平飼いたまご。



C 納屋というよりは、オシャレな倉庫。  
雪の中に真っ赤な壁が美しい。



D お二人が作る野菜や卵を心待ちに  
する人は確実に増えている。

移住は、50歳過ぎの新規就農者を受け入れてくれるまち探しから始まりました。このハードルを越えるのが、大変でしたね。

「人間として生きられる場所」。由仁町に移住されての印象をうかがったとき、奥様の由岐子さんは、こう即答した。関西に暮らしていたとき、高速道路から見た、はるか先の上空に漂うスマッグの不気味さ。2年ほど暮らした東京では、地下鉄人身事故などのニュース速報が頻繁に流れる。加えて、由岐子さんのシックハウス症候群も悪化。武さんは長年勤めた会社の早期退職と北海道への移住を決意する。

もともと農業への関心があったお二人は新天地での新規就農を目指し、埼玉県の研修農場に1年半通い続けた。修了後は“北海道で晴れて就農”的ははずだったが、現実は厳しかった。50歳以上の新規就農者を受け入れてくれるまちが、ほとんどなかつたのだ。「趣味で農業を始めるのではなく、農業を生業として移住するには体力的なこともありますし、年齢制限があるといふんですね」。片っ端から電話で問い合わせては、NOの返事ばかり。そんな中、森下さんご夫妻の熱意を理解してくれたのが、ここ由仁町だったという。「本気で就農を目指しているのなら、お力になりますよ。うれしかったです、本当に」。第一のハードルは、何とかクリア。

第二のハードルは、離農跡地探し。森下さんご夫妻の目標は、地鶏の平飼い(鶏舎での放し飼い)と鶏糞を利用し無農薬野菜を栽培するという循環型の農法。周辺農家とは、物理的にある程度の距離が必要だ。幸運にも、馬追丘陵の南端に希望の農場が見つかった。「眺めは素晴らしいですし、ここから新千歳空港までは30分で行けるんですよ。田舎暮らしでも、足の便はいいほうが絶対に便利」とお二人は頷く。

移住してもう一つ、面白い発見があったという。「長年夫婦でありながら、お互い何もわかっていないかったんですね。だって、さあ、仕事を始めましょうって言ったら、二人ともまったく別の方向に向かって歩いていくんですから」「そんなこともあったねえ(笑)」。陽だまりのなかで、お二人の笑い声が明るく弾んだ。

Yuni

窓際のテーブルに腰を下ろし外を眺めたとき、誰もが感嘆の声をあげるに違いない。北海道の中でもこれほどの景観を眺められる喫茶店は、そう多くはないだろう。石狩平野とその向こうに連なる山々。超スケールの借景なのである。馬追丘陵の中腹に建つ八角形の喫茶店「珈琲考房」。

ここに移住して18年目。主の武山敬二さんにお話をうかがった。「朝、後ろの丘から日が昇ってくるとき、遠くの山並みに日が当たって、それはもう美しい。学生時代、千葉から北海道へやってきたときに思い描いていた“あこがれの北海道の原風景”、まさにそのものがここにあるのだという。

札幌で長年自家焙煎と喫茶店を経営していた武山さんだったが、豆を焙煎するときに出来る音や煙が周りに迷惑になるのではなく、いつも気がかりで焙煎が思うように出来ず悩んでいた。そんな折、知り合いにこの地を薦められ、移住を即決したという。

最初は焙煎専門、その数年後に喫茶店を開店。たった3つのテーブルからの始まりだった。開店当初は、外から帰ってきては、「今日はお客様、来たか?」と奥さんに尋ねる毎日だったという。それが、長沼のパークゴルフ場や温泉に来る人たちが来店しだし、さらにその人たちの口コミにより、いまでは休日には30席がいっぱいになるほどに。

「ここは代々続く農村地帯ですが、私たちのようなよそ者にもとてもあったかい。妻が寝込んだ時なんておかずを持って来てくれたり、冬のドカ雪の時にはトラクターがどこからかやってきて除雪をしてくれるんですよ。」

「田舎の不便さをどうとらえるか、ですね。たとえば、子どもたちの通学は、僕が車で送っていく。バスも利用できるんですが、親子のコミュニケーションの時間にしようと。札幌じゃ考えられなかった。お子さんたちも「山へきてよかった」と言っている。武山さんのお話のおかげだろうか、深くコクがありながら、どこかほんのり甘いコーヒーが、心にしました。

裏手の丘から昇つてくる朝日が、地平線に連なる山々を美しく染めていく。何度見ても飽きない眺めですね。



■武山 敬二さん 喫茶店経営、コーヒー豆焙煎・販売



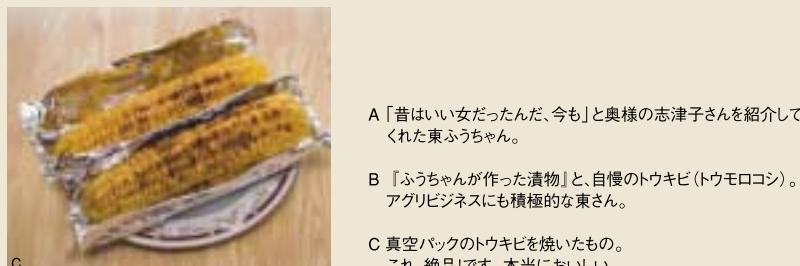
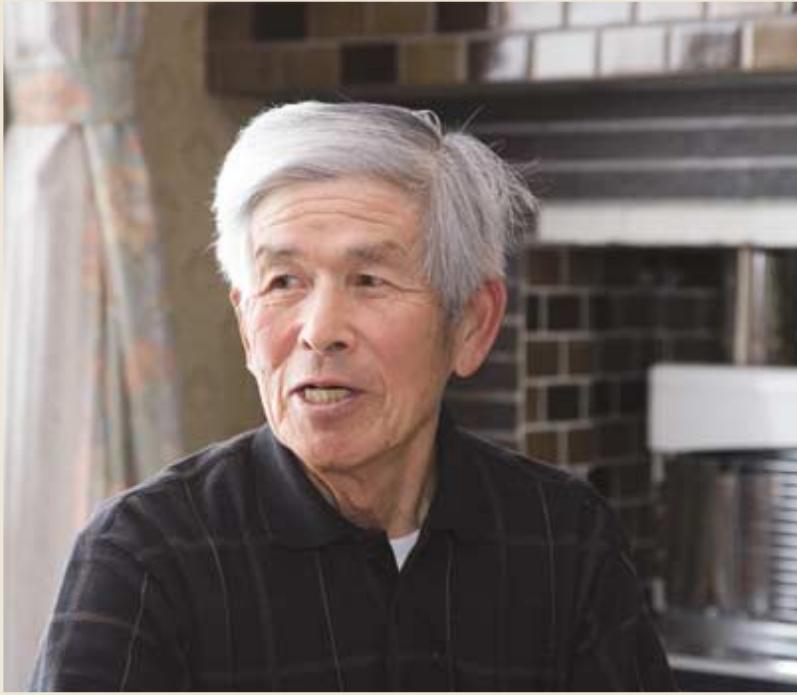
A 奥様手作りのケーキも大人気。今では、珈琲考房に欠かせないメニューのひとつに。

B 開店前の静かな時間が流れる店内。すべてのテーブルから素晴らしい景色が望める。

C 八角形のフォルムと赤いカラーがユニーク。まおいの丘の中腹に建つ「珈琲考房」。



親父の代のときに入植。  
この町に住んで75年になるね。  
住みやすいよ、札幌も近いし。 ■東房雄さん 農業



A 「昔はいい女だったんだ、今も」と奥様の志津子さんを紹介してくれた東ふうちさん。

B 「ふうちさんが作った漬物」と、自慢のトウキビ(トウモロコシ)。アグリビジネスにも積極的な東さん。

C 真空パックのトウキビを焼いたもの。これ、絶品!です。本当においしい。

札幌から車で30分という都会に近接する田園のまち、南幌町。農業を営む東房雄さんは、このまちで生まれ、育った。「ずっとここに住んでいるから、他のまちは知らん。住みたいとも思わんね」と笑う。明治の開拓時代、父親が淡路島から入植、やがて、切り拓かれた大地は東さんに託された。

以来、東さんは南幌の土の上で暮らしの歳月を重ねてきた。戦争や敗戦、さらには高度経済成長と波乱の時代を経て、それまで畑作一辺倒だった南幌町農業も、稻作へと転換。東さんも時代の流れを読みながら農業経営に取り組んできた。東さんをはじめとする農家の方々の努力により、現在、南幌町は良質な米や野菜を生産する、北海道の穀倉地帯としてその存在を確立している。

「畑から札幌や江別なんて、すぐそこって感じだよ」。南幌町をはじめ、まおいでアグリビジネス振興に取り組んでおり、農家の人たちも町外で開催される農産物販売などの催事に積極的に参加。

東さんも農産物直売所を設けたり、自宅を改造してサラダ教室も開催。現在は『ふうちさんが作った玄米漬け』など自慢の野菜を使った加工品を都市部や地元の消費者に提供している。

近所を歩けば、高校生の女の子にも「ふうちさん!」と声をかけられ、「よう!」と応える気さくな東さん。「前に北海道で牧場をやりたいっていう若い人たちをウチに泊めてやったことがあったけど、若い人たちが広々としたこのまちで自分のやりたい仕事を思い切りできればいいよね。札幌にも近いんだから退屈しないだろうしさ」

次世代に託す思いを抱きつつ、東さんはご自身の農業者としての夢を歩み続ける。「自分で作ったものを、お客様の顔が見える場所で販売したいね。それがまた次の励みになるから」

このまちはゆったり、のんびりしたスローな風が吹いている。けれど、畑にはしっかりと夢も芽吹いている。やりたいことに年齢は関係ない。アグリビジネスの先頭集団に、75歳のふうちさんがいる。

## まおいエリア町のプロフィール 都市へ続く道、自然へ至る道。 その2つが交差するところに、豊かな田園空間が広がります。

### 【南幌町】

■人口9,621人 ■人口密度118.1人/km ■高齢者比率18.9%

札幌から25km圏内に位置する農業の町は、道路網が整備され地下鉄札幌大谷地駅直結バスが運行されるなど交通アクセスも充実。都市に直結した農村暮らしそをお約束します。

●札幌まで車で約30分

都市と近接しながら、のどかな田園暮らし。

●キャベツを使った本格キムチ

全国でも珍しい、キャベツを使った本格キムチを製造。特産キャベツの甘みと唐辛子の辛みが絶妙です。

●アクティペイ&いやしのまち

ゴルフやパークゴルフで汗を流したら、南幌温泉へ。



### 【長沼町】

■人口12,611人 ■人口密度74人/km ■高齢者比率22.4%

長沼町は石狩平野の南東部に位置し、馬追丘陵からは、石狩湾と太平洋をはるかに望み、北海道らしい雄大な景観が展望できます。整然としたまち並み、パッチワークの田園風景は豊かな農村景観の典型です。

●札幌、新千歳空港もすぐ

札幌と新千歳空港から30kmの距離に位置し、日々の生活にも道外へのアクセスにも便利。

●「農」が豊かなまち

北海道内でも有数の米どころ。町面積の半分が水田で、20%が畑地と牧場という農業の町。町内就業人口の約30%は農業従事者です。



### 【由仁町】

■人口6,584人 ■人口密度49人/km ■高齢者比率30.0%

日本一のスケールを誇るハーブガーデン「ゆにガーデン」でおなじみの町。新千歳空港から約30km、札幌からは約40kmと、アクセスの良さも魅力の田園エリア。都会に近い、花いっぱいの田舎暮らしが楽しめます。

●「ゆにガーデン」(写真)

日本最大規模を誇るハーブガーデンでいやしのひとときを。体験農園も隣接。

農家による作付けなどの指導も受けられます。

●温泉宿泊施設「ユンニの湯」

コーヒー色の美肌の湯。由仁産の食材を使ったレストランにもぜひお越しください。おすすめはトマト丸ごとコロッケ!



### 【栗山町】

■人口14,625人 ■人口密度71.7人/km ■高齢者比率27.7%

栗山町は100年以上にわたり、町民が手と手をつなぎ、緑豊かな自然を守っています。いま、その優しい心は、人と自然が共生するまちづくりとして成熟期を迎えようとしています。

●蝶と緑の里づくり

国蝶オムラサキ(写真)の北東限の生息地として知られ、町民あわせて活動から環境庁の「ふるさといきもの里」の指定を受けています。

●福祉のまちづくり

栗山では昭和36年、全国に先駆け、町立て「北海道介護福祉学校」を開校。以来、「くりやまならだいじょうぶ」を合言葉に、やさしい福祉のまちづくりが進められています。

